特 71
967

301510-001-3

特71－967

いろは秘釈

小林 正盛／著

M45. 6

DAC－0001

いろは秘釋

明治
45. 6. 21
内交

特71
967

目次

表紙畫（五更會寄贈）　原田竹二郎先生等
口　繪（智山常磐寮藏）　智積院第二世祐宜僧正筆
いろは秘釋　小林正盛
一、序說
二、假名の起源
三、いろは歌作者の辯
四、いろはの字體
五、いろは文字の使用に就て
六、いろはの秘釋
七、結論
八、變體いろは歌
附錄　眞言宗青年會十年史　小林正盛

大本山智積院常磐寮所藏傳第二世祐宣僧正筆

いろは秘釋

小林正盛著

一、序說

高祖大師秘密緣起（本書開卷第一附圖參照）を按ずるに其第一卷頭の文に曰く、『夫法身常住の月の光は、衆生の機水にあらはれ、垂跡加持の花のにほひは有緣の國土に盛なり、震旦月氏の間に權化の跡是おほし、東亜日域の堺に利物の人何ぞなからん、爰日本國眞言根本の祖師います、弘法大師となづく、內には大覺遍照の位を祕し、外には小法（國）沙門の相を示す、形凡夫に同して法を萬里の外にもとめ、心佛界にひとしくしてさとりを一生の間にあらはす、眞言加持の道此時新に來り、曼荼羅頂の風此日盛に興れり、此故に上皇掌を合て秘密の印明を受、下

民首をかたふけて瑜伽の壇にのぞむ、誠是三密の法燈四生の依怙なり』と讃歎せられたるわが高祖大師は實に其降誕を去る千百三十九年に屬す、此くの如く年を經ること愈古くして、其德化愈新しきものある所以のものは何ぞや、其の德昭々、非凡の致す處たらずとせんや、此くの如きの大權が跡を我が國に誕し玉ひしは豈に單に教家の大幸とのみ云はんや、國家の至福、世界の誇りとなすに足らざらんや、殊に音韻文字の作、文明を不毛の野に拓きて、來者をして益思想界の拓開に便ならしめたるもの誰れか此の絶大の恩澤を感受せざらんや、然るに世移り人變り、いろは歌の作家に對しては、異說の數ふべきもの二三にして足らず、其の註解書の如きも『國語學分類目錄』のみにても、三十四種を數ふべく、其他語源の上より調査考覈せるものを擧ぐればまた數十種を算すべし、今此等の說を考證比較せんことは小冊子のよくする處にあらねば僅か

に、其の起源、字體、使用、及び歌意としての其の秘說の存する處を陳べ、附するに、變體いろはを以てす、蓋しこれわが高祖大師の降誕を記念せんが爲め、試みにいろはの略釋を以てせるのみ、之を序となす、

和字	漢字	涅槃經（略釋）	十住心（秘釋）
いろはにほへと	色匂	諸行	第一異生羝羊心
ちりぬるを	散去	無常	第二愚童持齋心
わかよたれそ	我世	是生	第三嬰童無畏心
つねならむ	誰常	滅法	第四唯蘊無我心
うゐのおくやま	有爲ノ奥山	生滅	第五拔業因種心
けふこえて	今日越	滅已	第六他緣大乘心
あさきゆめみし	淺夢不見	寂滅	第七覺心不生心
ゑひもせす	醉不爲	爲樂	第八如實知自心
			第九極無自性心
			第十秘密莊嚴心

二、假名の起源

我國神代に於て文字の存否は疑問なりと雖も大方は文字なしと云ふ說を取る、我國に文字あるは應神天皇以後支那文字の傳來後の事に屬す、謂に、聖德太子の頃より、漢字の音を我國の言葉に符合せしめて認むる樣に至りしと雖も意味の上より漢文を學び、音韻の方よりまた漢文字を學ぶと云ふことは如何にも困難なりしなり、爲に言葉を寫すべき便利なるいろはの出て來て、單に言靈のさちはふ國をして、さらに幸はふ國たらしめたるのみにあらず、文明の基礎を樹立せること日本文明の先驅たらざらんや、『いろは字考錄』に假名の種類を擧げて曰く

假名とは、凡て假字に三種あり、一には平假名字、二には眞字假字、三には片假字なり、かなと云ふ事は漢字の音をかりて義をからざるなり、

六書の中の假借と義同じ、貝原篤信の『日本釋名』に云く、かなのなの字は文字なり、文字のよみこえは其の字の名なり、かりなといふべきを略しかなと云ふ、次に眞字假字とは、もろこしより來るまことの本字なり、故にまなと云假字は其字の意を用るにあらず、かりそめに日本にて其音を借りたる字なればかりなと云ふ、かんなとも云ふなり、次に片假字とは全字に音をかり、其字の片傍を略出する故に片假字と云ふ、今いろはは普通に平假字と云ふ、平は平滿、片假字の字のかけてみたざるに對したもの、眞假字は萬葉時代までの一字一音又は義訓を以て通用したる、一に萬葉がきとも云へり、次に片假字は吉備公より始まれりと云ひ傳へ居れどもさたかならず、且つ今はいろはに關することを至急とするが故に委しくは略しつ、以上に依りて予は我國の假字、萬葉眞假字に始まり、片假字に一變じ更らにいろはの平假字に變ずと見るべきならん、

次にいろはの作者に就いて述べん、

三、いろは作者の辯

南紀名高浦の僧全長と云ふ人の『伊呂波字考錄』と云ふものに、作者に關する異說を擧げたり、それを左に引證すべし

作者を辯ずるとは異說多端なり、或はいろはを聖德太子の作と云ひ、或は傳敎大師の作とも云ふ、並に誤なる事、『天理抄』に見へたり、或は母字は閑院の左太臣冬嗣勅を奉てこれを作ると云ふ、或は蘇我の馬子の作とも云ひ、或は橘の逸勢作とも云ふこれらもより所なき批說なりと云ふ事『本朝學原浪花抄』に見へたり、又元嘩の『以呂波註解』の序に云傳云以呂波は三人の作れる所なり、色匂散者勤操の作れる所なり其後杵築明神より夢想の祕歌二首ありて、我世誰常乃至不醉者弘法

の作る所なり、竟に京の字をおくは傳敎の添る所なり已上また『羅山文集』にも石淵寺勤操、延曆寺最澄、高野山空海四十七字の以呂波を唱和す又古今の序註には以呂波と云よりらむにいたるまでは護命の作うゐよりせすにいたるまでは弘法の作なりと云已上又貝原好古が『和事始』には『簾中抄』を引て云四十七字本歌の詞なり、護命空海これを作るいろはにほへとちりぬるを以上護命これを作るわかよと云よりせすにいたるまで空海これを作る、護命空海同時の人なり、已上寺島翁が『和漢三才圖會』に評して云、いろはの四十七字新意に出るに非ず、天竺悉曇の字母に本づいて草の字を作る何ぞ唱和してこれを作らんや、空海は天下の能書特に草書の聖なり、空海一人の作なる事必せり、已上好古も和事始に『河海抄』を引て云今の世のかなは弘法大師はじめて作れり、

作者のことに關して異說數ふるに遑あらざるも、予は此の說に隨ひわが高祖の御作たることを信ずるものなり、且つ『字考錄』に依れば大師支那より歸朝の後、出雲國簸川郡鹽冶村(『便蒙鈔』には神門郡とあり)に於て御製作あり、その所伽藍となり、古來呼びていろは寺と稱し眞蹟こゝに存すと、其寫『便蒙鈔』に見ゆ、又高野山には眞如親王に奉れるいろはと云ふがあれども、こは多少議論の存する處のもの、兎にかく、大師のいろはの御製作が象形文字以外に發音文字を以てし、更らに意味深遠なる文字を以て排列したるは、日本文明史上の一大賜たらざらんや、

四、いろはの字體

いは以の字なり、吳漢同音いの字の左の篇は地なり、地は廣く物を載る功ある故に下に書くなり、右の點は天にして天は地に和する陽氣なれ

ば上に書て地に應ずるなり、ろは呂字、(吳漢同音)ろ字は口をふたつ書く故上の點に頭をつけよといふ、はは(吳漢同音)波字、には吳音の略仁字、ほは吳音保字、へ字は邊、或は扁、或は閉、或は𠂉、𠂉は別の古字、國字訣には部の半體、乃に變じ、乃變じてへといふに至れりとも云へり、白石の『同文通考』には邊の字を省き用ひしとも云へり、『和字正濫抄』には(音弗、略音保、保と敝と通用と云り、と字は止字、(和訓)ちは智字、(又は知字吳漢同じ)りは利字(吳漢同じ)利の全字にして利の旁をとるにあらず、ぬは奴字、(吳音)るは留字、(吳音)をは遠字、(吳音の略)わは和字、(吳音)かは加字、(吳漢同じ)よは與字、(吳漢同じ)與は与の古字なり、たは太字、(漢音の略)れは礼字、礼は禮字の古字にして漢音を用しなり、そは曾字、(漢音の略)つは門字なり『字考錄』には鬪は鬪の本字なり、日本紀に額田大中彦皇子獵于鬪豆雞計一と云ふ、鬪は唐音にて

都豆反、つの音なり、どうの音漢音なれば闘の字とするを正とす、『正濫抄』には川和訓とあり、ねは禰字祢は禰の俗字なり、なば奈字、(吳音)、らは良字(吳音)、むは武字(吳音)、うは于字(吳漢同じ)、ゐは爲字、(吳漢同じ)のは乃字、(吳音の略)是も乃はなゝれども、ナニヌネノの通音にして、なをのに轉じて用ゆ、又『同文通考』には、乃、濃の音相近し、借て濃に作る、信濃を信乃に作る類なれば借音なるべし、おは於字れは於の俗字なり、(吳音)くは久字(吳音)やは也字、(吳漢同じ)まは未字(吳音)けは計字吳音、ふは不字、こは己字(吳音)えは衣字なり、又江字『正字篇』に、えは衣の字にしにかくことありしを又あやまりて元とかく、元は音ぐはん、讀音はもとなり、えの讀音なし、元は衣のくづしあやまりなり、ては天字、(吳漢同音)あは安字、(吳漢同音)さは左字、(吳漢同音)きは幾字、(吳漢同音)ゆは由字、(吳音の略)めは女字訓を借て音とせり、み

は美字、(吳音)しは之字(吳漢同じ)ゑは恵字、(吳音)或書にゑになすは草の行なり、ゑになすは草の眞なり、ゑになすは草の草なり、大師の眞蹟に一點なきは草の草なり、ひは比字、(吳漢同じ)もは毛字(吳音)せは世字、(吳音)すは寸字(吳音)

以上は聊か其の字體につきて略釋を試みたのである、

五、いろは文字の使用につきて

次に文字の發音につきては一言せざるべからざるものあり、端のいの音の時はかろき聲に用ゆ、すべて開音の上下訓のかしら、訓の中、又は下にてきにかよふには、い字なり、訓のかしらとは、いろ(色)、いは(岩)、いるかせ(忽)の類なり、開口の上は、因、印、引、韻、乙、一、般、優、抔なり、開音下は禮、經、齊、戒、雷、老、幸、の類なり、訓の中又

は下にてはキにかよふ字は、樂たのしき　嬉うれしき　脇楯わきたて　就付つきて　の類はイキシチニの相通にていの字を書なり、ひにはあらず、

わはの使やうにつきて、いろはのはをわと讀ことはこはハヒフヘホの唇音轉じてワヰウヱオにかよひて喉音となりてはをわと讀なり、詞の中杯にてはいはふ(祝)ちはやふる(千早振)の類、詞の下にてはよはひ(齡)をはり(終)なとのことし、又てにはのはは、わが庵は、君はまとろめの類也、はの音をワと讀時は阿波・泡、不破ノ關、諏訪、常盤井、音羽の類なり、是を前のはといふ

次に端のほの使ひかた、にほへとののほをおと讀なり、此はハヒフヘホ轉じてワヰウヱオにかよひてほをおと讀なり、すべてはしのほは詞の上下にありかろき假名、又は一字の音を訓に用る時はほの字を書ておと讀む訓の下にあるときは、ほのほ(炎)、にほ(鴉)、しほ(鹽)、いはほ(巖)、

の類、次に端のへの字の使ひかた、此にほへとのへをえと讀ことはハヒフヘホの轉じてワヰウヱオに通ひてへをえと讀むこはへえ、相通じてよむ、例へばおきなへ(補)、たとへ(喩)、あらそへ(爭)、おとろへ(衰)、の類である、次に中のをの事である、ちりぬるをのをを中のおといふ、訓のかしらかろき聲、をの(小野)をくらやま(小倉山)、をんな(女)、の類、次にんむの字につきては、つねならむと、むを跳假名に用ふるをはむとんとは通じて用ゆ、しかれども、音ば少したがひありてむは唇音にて唇をたゝきてすこし開く音なり、んは唇を合で鼻より出る音なり別ある故後人んの字を作れり、又ンの草んなり、むはんにかよへどもんの字はむにかよはず、むは譬ばむめ(梅)むま(馬)など上に書ども、ん字を上にかゝず、ンは梵字の𑖩是に取れり、梵書を按ずるに𑖩を空點とも圓點とも云ふ、𑖩是を仰月とも又莊嚴の點ともいふ、後のわの事、わか

よのわを後のわといふ、こは上にある時はわれ（我）、わろし（悪）、わかつ（分）わた（綿）抔なり、一字の訓のときは、わ（輪）の類なり、詞の中にありてはみつわくむ（三輪組）みわ（三輪）一字の音は倭、話、抔なり、次に中のゐ、うゐの井を中のゐといふ中のゐは訓の下にありては外にかよはぬ故にゐの字を書なり、うゐ（有爲）、あゐ（藍）くわゐ（鳥芋）の類、のの字、うゐののをまるのといふ、乃、是をつへつきのと云ふ、おくのお字、おくやまのおを奥のおの字と云ふ、おばしま（檻）、おろす、（嵐）、おに、（鬼）、の類、うふの事今日のふを後のふといふ訓の下にありてうにひゝくかな、きのふ、（昨日）けふ（今日）の類ふの字を書なり、うを前のうといふ、前のうはよみのあとを引くに又くの字と通ふときかならずうの字なり、正たゞしく珍めづらしく近ちかくの類なり、中のえの字、えの字を中のえといふ、かろきよみに用ゆ、えだ（枝）えらふ

（撰）抔なり、又ゆにかよふ、（代）かゆ（捕）とらゆ（添）そゆる の類、おくのゐの字、ゐひものゐはおくのえといふ おもきよみの頭、ゐみ、（笑）、ゐふ、（醉）、ゐる、（穿）下にありてかよはぬかな、いしするゐ、（礎）、ゆくするゐ、（行末）、つくゐ、（机）、の類なり、おくのひの字、端のいよりかろきなり、よみの中にありてまこふ事多し、いひ（飯）、ちひさし、（小）、かひ、（貝）、の類なり

以上にて大概はいろは文字の輪廓に對する説明を了したるなり、これよりいろはの秘釋に移らん、

六、いろは秘釋

さて此のいろは歌が、涅槃經の四句の偈、即ち諸行無常、（いろはにほへとちりぬるを）、是生滅法、（わかよたれそつねならむ）、生滅滅已（うゐ

のおくやまけふこえて）寂滅爲樂（あさきゆめみしゑひもせす）の四句の偈を和解して今樣體の歌とせしと云ひ傳ふ、これ一重の釋なり、然るに興教大師は、其著以呂波略釋、及び因假名釋自在に於ては更らに深秘の釋を加へて、第一の句『いろはにほへとちりぬるを』を以て十住心中世間三箇の住心、第一異性羝羊心、第二愚童持齊心、第三嬰童無畏心に當て、即ち、世人の名利、愛欲の深抗に沈んで何等向上の方面を知らざるの徒を咏したるものと云ふには深き意義のある處となす、予は一句づゝにつきて予の私見を加へて釋しゆかん、第一の句を涅槃經の句意に當つればこれ客觀的、且つ消極的なり、若し十住心中の世間三箇の住心に當つれば、これ主觀的にして積極的なり、いろはにほへとも、色は濃艶の姿を凝らして、春に誇る處、こは二樣に說くを得べし、是を消極的に云へば、花の濃艶なる姿は人をして惑溺せしむるものと見ば花の色香

が春に誇るが如きは甚だ厭ふべきに似たれども、即ち此方に惑溺を豫想してかゝるが故に、花の咲き句へるは煩惱無明の凝結せしものゝ如くに見ゆれ、花それ自身、咲ける其心には何の煩惱か宿らん、『迷悟吾れに在り』て『心清淨なれば佛土清し』で客觀そのものになれば無常のうち自から深意のあるあり、ちりぬるを、をの一字に深き意義あり、消極と積極と、主觀と客觀と自から一種深遠なる哲理を存す、

第二句『わかよたれそつねならむ』涅槃經の句意に當つれば、是生滅の法なりと、十住心に當れば、第四唯蘊無我心、第五拔業因種心、第六他緣大乘心、第七、覺心不生心、を接す、四句の偈は同じく消極的にして又客觀的解釋なり、十住心は積極的にて又主觀的解釋なり、興教大師の釋に云く、『水流れて常に滿たず、火盛なれども、久く燃へず、日出でゝ須臾に沒し、月滿て已後缺ぐ、尊榮高貴の者も無常速かなること是

に過たり』とありて、如何なるものも皆な無自性、生滅のものである、萬のもの無常、生滅のものなるを無常生滅と徹見すること能はざる故に其の迷見を破らんが爲めに、人無我觀、法無我觀を修して、絶對無所得觀に入るのが此の第二句の意なり、以上の二句、無常と生滅、是を消極的にのみに解すれば、何の取るべきなく、何の見るべきなし、然れども、先づ不變の本體を見んと欲せば、まづ變化の狀態を看破し來らざるべからず、枕を叩いて夜を明したる者にあらずんば、眞に音樂美を說くべからず、百死の間を往來したるものにあらざれば一活不動の位置に進むべからず、佛敎の意は無常觀に於て、世相の着すべからざるを敎へ、無我觀に於て人生の拘すべからざるを說く、常住の宇宙觀を捉へんとせば先づ無常を知らざるべからず、不動の人生觀を獲んと欲せば先づ無我觀に修練せざるべからず、是れいろはの第一、第二句のある所以である、

第三句、『うゐのおくやまけふこえて』、は涅槃經の句に當れば、生滅々已なり、消極的客觀的には無聲無臭の境なり、無相至極の天地なり、桃花流水杳然として去る處なり、併しながら、積極的にはまた主觀的には十住心の第八如實一道心及び第九の極無自性心なり無聲無臭と云ふも、無相至極と云ふも此處に第一の宇宙が破れて第二の宇宙起る處なり、第一の人生滅して第二の新生起る處なり、予常に云ふ、如實知自心とは、第一人格を亡ぼして第二人格を建立する時なりと、第二人格の建立せられたるは大悟徹底なり、再生の新人なり、其始を如實知自心と名け、其の最終を極無自性心と名く、眞に頭上の明月と一致し、脚下の白雲と冥合するの境、圓滿なる人生觀こゝに盡き、完全なる宇宙觀こゝに極まる、有爲轉變の奥山を超越して、乾坤獨朗、明々地に濶步するものならずとせんやである、

第四句の『あさきゆめみしゑひもせず、』は涅槃經の句に當れば寂滅爲樂なり、消極的客觀的に表はす文字としては、寂滅を以て配したるなれ、淺見者往々此皮想文字に拘泥して寂滅の文字を狹解す、寧んぞ知らんや大哀の底には白熱の光輝閃くことを、大賢は愚なるが如し、消極的客觀的に見たる最終宇宙觀は不變不動なるが故に無限の寂靜界に似たらんなり、然れども此の不變不動の大寂靜界は積極的主觀的には胎藏界曼荼羅の大莊嚴の寶藏界にして、花は咲き〳〵佛位に座し、花は散り〳〵に佛法を演ず、一塵一法を捨てず、一滴を損せず、萬德こゝに具し、萬相悉く用あり、即ち此の不變不動の大寂靜界は同時に大變化大活動の金剛界曼荼羅の顯現なることを、積極的主觀界の曼荼羅なるのみならず、消極的客觀界をも融して、所謂る百尺竿頭一歩を進めて、法、法位に住して、阿自から阿を說く處、十住心の所謂る祕密莊嚴心、弘法大

師の大三摩耶心宇宙法界の極祕にあらずして何ぞや、故に興教大師の祕釋に曰く、

淺夢不醉とは此は得果なり、夢とは妄執邪見なり、此を離るゝ故に涅槃を證す、醉とは無明癡闇なり、此を越るが故に菩提を得、菩提は覺悟なり、三毒の酷醉を寤すが故に涅槃は眞靜なり二取の虛妄を離るゝが故に、不の一字は上下に遍在す、不夢不醉の故に、又夢醉は苦滅なり、若し此の義に據らば三妄の巨醉を寤し、一眞の大覺を得ん、淺とは修羅の長脚は八繕も深からず、大鵬の廣翼は九萬も猶ほ狹し、無常に迷ふの當初は欲愛の小河猶ほ深し、有爲を越るの只今は生死の大海還て淺し、

と云はれたり、眞の密敎の法門を翳して之れを世の千敎萬論にのぞむ、須彌も高からず、巨海も尙淺きに似たるものあり、密敎の法門豈に尊が

らずや、只それ之をして其用あらしむるものは人なり、人あに努力せざるべけんや、然らずんば錦繡を以て泥炭を飾るに過ぎざるなりである、

七、結論

以上いろはを說くには此を其の和歌と見る時と、字音として見る時との別あり、和歌と見る時に於て重々の秘釋あること上既に述べたるが如し、字音として見る時豈にまた重々の釋なからんや、されども字音より見る時勢ひ五十音を說き來らざるべからず、されど、かくては音韻學上の專門の事の涉る恐あるを以て音韻に關しては之を省けり、併しながら、六塵悉文字の宗意より之を見れば、密敎より見たる音韻論また豈に特殊の秘釋なからんや、契仲阿闍梨の『和字正濫鈔』に曰く、

凡そ人の物いはむとする時喉の內に風あり、天竺には此風の名を優

陀那といふ、此風外の風を引て丹田に下り、腎水を擊て聲を起す時、斷齒、脣、頂、舌、咽、胸の七處に觸れ、喉內、舌內、唇內、の所轉に依て、種々の音聲ありといへども、其數五十音に過ず、唯人間のみならず、上は佛神より、下は鬼畜に至るまで、此聲を出す、又唯有情のみにあらず、風の木にふれ水の石に觸るゝたぐひの非情の聲までも、これより外に出る事なし、息の字の上の自は鼻なり、鼻は息の通ずる處なり、鼻は肺臟に屬す、肺は金なり、金は風の精なれば、同氣相感じて氣を引時も肺先受る故に清涕の出るも此しるしなり、心に从がふは、心の動靜に隨ひて息に緩急あり、嗔喜の相、さながら息に顯はるゝ故なるべし、密敎には此息をやがて心と說ける事あり、一條の息わづかなるに似たれど、壽命これにかゝれり、心と壽命とを全くして起る言語なり、此意をよく知らば、法身佛の常恒演說の法もまた、此一

息を出べからず、『沙石集』に和歌は日本の陀羅尼なりといへるは陀羅尼を此には摠持と飜ず、無量の功德を摠攝し、任持する故なり、其中に一字に多義を含む意をもて、短き和歌の深き意を含むをかくはいへり、委しくいはゞ和歌につゝらぬさきの四十七言早く陀羅尼といふべし、金剛語菩薩を無言大菩薩といふは、言の實相に達すれば、言すなはち無言なり、是を『釋摩訶衍論』に五種の言說を明す中に如義言說といへり、たとへば鏡の空なれば、まとかなる形、白き色あれど、萬像をうつすにさはりなきがごとし、

予は正濫鈔の著者の意に隨ひて、言語は即ち氣息、氣息即ち壽命といへる深義に對して、其の解說のよく密敎の深趣に達せるものなるを信するものなり、いろはの字音一たび舌頭に動くの時、わが全身內外に亘りて法身如來法界塔婆を震動せしめ、兩部曼荼羅の秘密莊嚴界を活躍せし

むるとなす、いろはの字音はまた絕對の陀羅尼ならずや、況んや、淺略にしては涅槃經の四句の偈意を解釋し、深秘としては、十住心橫豎淺深の義を表顯するものをや、わが高祖大師の鴻恩、此の日本文明の大宗師に對する誰れか仰嘆せざらんや、

八　變體いろは歌

其一　細井廣澤

君臣父子夫婦兄弟
きみまくら、おやこいもせに、えとむれぬ、
井穿田植末
ゐぼり、たうへて、すゑ
繁天地榮世歎莫舟艘縄
しける、あめつちさかゆ、よをわひそ、ふねのろなは、

其二　谷川士清

天地分神日本成禮代大嘗齋
あめつちわき、かみさふる、ひのもとなりて、ゐやじろを、おほんゆに
ト設是不絕末幾世
は、うらまけね、これそたえせぬ、すゑいくよ、

雨降あめふれは、ゐせきをこゆる、水分みつわけて、易諸人やすくもろひと、下立おりたち
植群苗うゑし、むらなへ、その其稻いねよまほにさかえぬ、

本居宣長

其三

住江在すみのえなる、田居たゐにさをとめ、女早苗植わせうゑぬ、稻苅いねかりてよ、落穂拾おちほひ
兒等其從ろへ、こらそゆしも、參蒔むきまけ、粟生作あはふつくれや、

田中道萬呂

其四

天地成あめつちなせる、菅生たみのくさ、稻齊蒔いねやまけり、教をしへそふわる、親子おやこ
兄弟等えと、丁等よほろらも、不餓群うゑすむれゐて、眼居にきはひぬ、

拙齋

其五

小田植終をたうゑおふし、動居ゆらきゐぬ、稻八穂得いねやほえけり、歡よろこばせ、並産なべてむ
鹽神業すびの、かみわざと、天地あめつちくにぞ、守國まもれる、

本居內遠

其六

眞言宗青年會十年史

會員　小林正盛

我が眞言宗青年會が始めて呱々の聲を擧げし紀元に溯れば、恰も明治三十年日清戰役の結果新古合同して戰死者追悼會の護國寺山內に營まれたるの時に基す、當時古義青年者間にありては、眞言宗協同會なるものあり、學生間に親睦を結びて相往來せるありて新義の學生と相往來するの機關なかりしが、會々此の好機會に際し眞言宗青年交通の機關なかるべからざるを感じ融道玄君等主唱の下に相往來するもとなれり、然るに圖らざりき明治三十二年新古分離非分離の聲高く遂に我が青年會は非分離運動に加擔し、當時東都に在學せる岡本慈航君等の指揮の下に、錦輝館に於て大會を開催し、著りに非分離運動に助力せしも分離の大勢如何ともなすべからず、遂に青年會の組織も一變せざるを得ざるの運に至り、乃ち眞言宗學會と稱し、三十二年十一月同心町廣野諦觀君の宅に於て發會式を擧げ、純研究を標榜して三十五年二月に至る迄第八回まで繼續して、或は音羽環碧樓上に、或は下谷妙極院內に、或は本郷西片町の融道玄宅に開催したり、偶〻會員田中清純の主唱に依り、同年始めて第一回降誕會を開催することとなれり、此を以て本會第一期新發展期に入るの先驅となす

第一回降誕祝賀會は三十六年六月十四日を以て神田錦輝館に開く、式文は小林正盛之を作し講演は小林正盛、融道玄、山縣玄淨、澤柳政太郎、井上哲次郎、三上參次、五十嵐光龍、諸君の講演、釋雲照律師の祝文ありて、富田敦純著の『弘法大師』を印刷して出席者一同に配與す

第一回としては頗る盛會を極む、特に故山縣師の阿字觀最後の法輪たりしを偲ばずんばあらず

第二回降誕祝賀會は三十七年六月十五日小石川音羽護國寺に於て開く、村上專精、櫻田雷斧重野安繹、大内青巒諸君の講演ありて古川義天著の『弘法大師の片影』を施本となす

第三回降誕祝賀會は三十八年六月十五日同上護國寺に於て開かれ、小林正盛、井上圓了、白鳥庫吉、浦上隆應、久米邦武諸君の講演ありたり、小林正盛作の『のぼる朝日』の讃歌、及び古川義天編の『弘法大師の遺訓』を施本となす、此年一月『弘法大師降誕會演說集』を出版す

第四回降誕祝賀會は三十九年六月十五日神田錦輝館に於て、立教開宗壹千百年に相當せるを以て其記念を兼ね頗る景氣を付けたり、即ち當日の講演者は小林正盛、釋慶淳、長谷川泰、渡邊國武、南條文雄の諸君なり、別に釋慶淳著の『曼荼の風光』を施本となす、

第五回降誕祝賀會は四十年六月十五日神田錦輝館に於て開かれ、懸賞を以て募集せる讃歌、及び大師眞蹟繪葉書を配與す、講演者は大槻快尊、岩堀智道、高木兼寛、三宅雄次郎、大内青巒の諸君なり、此年日本橋別府新七氏は本會に大師誕生像の備へなきを嘆じ銅像一軀を寄贈せられたり、然るに奇なるかな、丸山貫長師も此際合掌木像の誕生像を自から彫刻して寄贈せられたるは本會の最も光榮とする處なり

第六回降誕祝賀會は四十一年六月十五日神田錦輝館に開く、講演者は五十嵐光龍、前田慧雲加藤咄堂、片山國嘉、藏原惟廓の諸君にして、小林正盛の著になれる四國遍路の一節を餘せる『南無遍照』及び杉谷代水氏作の『大師讃歌』及び三浦覺玄作の讃歌『法の道』を施本となす、

第七回降誕祝賀會は四十二年六月十五日錦輝館に於て開く、講演者は神林隆淨、櫻田雷斧、高楠順次郎、新井石禪の諸君にして前年に比して頗る振はざるものありしが如し、

第八回降誕祝賀會は四十三年六月十五日音羽護國寺に於て開かる、講演者は佐藤獨嘯、山路愛山、渡邊海旭、櫻田雷斧の諸君にして此年は計畫を一變して東京諸講社員の參拜を許して、高城大僧正を導師とし大法要を營む、更に園遊會、餘興として太神樂、講談等の催あり、更に空也念佛の寄附などありて參拜者約五千餘と註せられ、青年會始まつて以來の大壯觀を極めたり、當日配與せるもの佐藤獨嘯著の『降誕會』と題し八宗論を仕組みたる一齣の脚本なりき、

第九回降誕祝賀會は、四十四年六月十一日音羽護國寺に於て開く、組織を前年に倣ひて大發展を試んとせしが生憎雨天にて諸事大蹉跌を生ず、講演者は櫻田雷斧、中野堅照の兩君にて夜間は本郷上宮教會に於て宮崎榮雅、五十嵐光龍、小林正盛、神林隆淨、三浦覺玄、中野堅照、樹下快淳の諸君にて小林正盛の編に成れる『南無大師遍照金剛』『弘法大師和讃』を配與す大法要導師として正城大僧正勤修せられ、大園遊會等の催も豫定の如くならざりしはまた遺憾とせざるを得ざる處なりき、

第十回降誕祝賀會は豫定の如く今年之を營むこととなれり、以上記述せるが如く降誕祝賀會も回を重ねること茲に十週年、今や其の内外の事務整備の緒に就き、多年の宿望とせる寄宿舍の創設の如き、明治四十四年五月一日より宮崎榮雅、大槻快尊、樹下快淳、本田榮亮等の委員主腦となり、常任監督として御嶽隆道舍生を指揮し、目下十八名の宗内學生と共に起臥し、家族的生活の下に或は娛樂、或は文藝、或は運動、或は練舌時に或は先輩者を聘して講演を開き既に小林正盛の講話正田運猷の歐米漫遊談などありて特殊生活を講じつゝあり、其の維持法に至つては、去歲維持會を創設し會員を募集し、目下二百餘名を得たり、維持發記帳額二千三百圓に達し、愈其基礎を鞏固にし益報恩謝德の淨業を運ばんと欲す、尙本年四月三教會同の爲め

上京せる土宜門跡、岡本慈航、石堂惠猛の諸師を聘し豐山大講堂に於て一場の講演を請ひしが如きは實に本會の榮とする處となす、偶降誕十週年記念に際し遠く其の起源に遡り聊か其の經過を略叙す、顧みれば、最も古き主唱者岡本慈航、石堂惠猛、融道支、古川義天、廣野諦觀、(今猛逸と改名)阿部全鼎、岡本密乘、田中清純の諸先輩は既に南山に西都に東西相去り南北參商の觀を呈するに至れりと雖も、諸君が努力せし事業の萌芽は年一年大を加へて今や青年會の降誕會は東都の年中行事の一に數へらるゝに至る、然れども前途尚遼遠事業は益企劃せざるものあり、希くは共に報恩の誠を凝らして着々光明の彼岸に達せんことを一言を叙すと云ふ、

口繪の筆者は智樂院第二世祐宣僧正字は長善、俗姓は深澤氏下野西方村の人、翁冠にして居村正安寺の住職に就て得度し、後諸國を游歷す、畫事を好み墨畫を能くす、慶長九年十二月僧正に任じ同十七年十一月化す壽七十七、此繪御嶽隆道氏の畫刀に依りて掲載することを得たるは本會の光榮とする所とす、

269
368

明治四十五年六月十二日印刷
明治四十五年六月十五日發行

第十回弘法大師降誕會記念

編輯者　小林正盛
發行者　大槻快尊　東京市牛込區西小川町二丁目四番地
印刷者　佐々木俊一　東京市神田區中猿樂町四番地
印刷所　秀光舍　東京市神田區中猿樂町四番地

發行所
東京小石川區大塚仲町二十三番地
眞言宗青年會

無斷轉載
真言宗
青年會
紀元二千五百年
紀念